清盛と佛御前

序言

此『清盛と佛御前』は數年前單に『清盛』と題して本誌（『早稲田文學』）に掲げたものを、一昨年一度其の第二幕だけ改作して本誌に再掲し今回いよ〳〵藝術座大正五年度の春季興行に上演する目的で改めて第一幕第二幕とも殆ど面目を一變するまでに作り直したのである、此たびは第一回を一月二十四日より大阪中座、京都南座、神戸聚樂館で開演し三月二十六日より東京帝國劇場で開演することになつてゐる、其の役割は、

佛御前（二十四五歳）松井須磨子
清盛（六十歳位）澤田正二郎
宗盛（三十四五歳）中井哲
叡山の法師順念（五十歳位）宮島洛陽
同西念（三十歳位）小川
安部資成（三十歳位）中田正造
大夫判官季貞（二十七八歳）宮城千之
侍士（二十二三歳）花田幸彦
妓王御前（二十二三歳）三好榮子
侍女澤井嘉枝
侍女磯野不二子

尚、此の劇の舞臺面、衣裳、道具其の他詳細のことは、大正二年五月植竹書院發行、『影と影』と題する私の著作集に收めた初作による、

大正五年二月

人物

平清盛（六十二歳）
前右大將宗盛（三十四歳）
佛御前（二十歳）
妓王（二十二歳）
安部資成
大夫判官季貞
叡山の法師二人
侍士二三人
侍女二三人

場所

京都、西八條、清盛の邸

時

治承四年三月十六日、午後より夜に及ぶ

第一幕

上手半面、横ざまに一段高く寢殿の一部を現はす、室内の調度は、すべて平安朝の優麗高貴な好み、正面の半を白地薄模樣の襖で仕切り、其の奥には遙か離れて上手から下手へ打ちわたした細殿が、廂縁ごしに見える、下手から奥へかけて中庭の景、庭の中央に櫻の大木二三株、花が丁度眞盛りである、遲い午後の光線が、おつとりとした暖い色にあたりを包んでゐる、

素絹奴袴で脇息に倚つた清盛を上座にして、一方は薄紅梅の小打着に袴の妓王、及び侍女、法師、一方は侍女、資成、季貞、侍士

等宴席の體に居並ぶ、銚子高坏の外、妓王の前に箏を置き、琵琶、笛、鼓等管絃の樂器をそれ〳〵資成、季貞、侍女、侍士等に割りあて、暫時管絃樂の中に、靜かに幕を揚げる、やがて奏樂止むと、

清盛　やあ、御苦勞々々々、御坊は鼓も上手と聞いたが、なか〳〵管絃のたしなみが深いと見える、

法師甲　お恥かしい手すさびでございます、もつとも此のごろ叡山の法師仲間には琵琶や鼓を弄ぶことが流行でござります、

清盛　結構ぢや、私も管絃の遊びはすきぢやが、併し御坊、管絃が面白いといふのは、あれはみんな聞く人の心がらぢやなう、自分の身がおもしろければ、聞く音樂もおもしろい、自分の身が悲しければ、聞く音樂も悲しい、此の世は天晴淨海が世ぢやと思ふと、其の心をしらべて呉れるから管絃の音までが浮立つて面白く聞かれる、御坊などは、いつも菩薩や天女と往來して居るから自然と管絃の音が極樂淨土の音樂に聞えるであらうな、

法師乙　はゝ、はゝ、それ程でもございませぬ、斯うして三法に身を捧げては居りまするが、やはり肉身の息は通うて居ります、極樂淨土の音樂よりも、此の世の女菩薩方の爪音の方が眞身にこたへて有りがたいと思ふ時もございます、

清盛　はゝ、はゝ、御坊も腥坊主の方ぢやな、

法師乙　是れは恐れ入りました、入道さまのお仕込で段々人臭い息が通うてまゐります、しかし入道さま、當節の法師づれは、昔と違ひまして、みな元氣ものばかりでございます、口でこそやれ淨土ぢや穢土ぢや極樂ぢやと申しますが、内心では未來の淨土よりも、此の世の穢土の方が大すきな手合ばかりでございます、殊にかうして美しい女菩薩方のお酌で一こん頂いて、よい心持になつてまゐると、なか〳〵此の世の執着は斷たれませぬな、あゝ、世は末になりました、末世王法なげかはしい次第でございますな、

清盛　やあ、御坊は大分まゐつたやうぢやな、

法師甲　此の者は酩酊いたしますと無作法な事ばかり申して恐れ入ります、あまり長座をいたして、無禮をはたらいてはなりませぬから私どもはこのまゝ御免を蒙りたうございます、

法師乙　これ朋輩、そのやうな事は言はぬものぢや、たとひ酩酊いたさうがいたすまいが、この順念、思うたことは屹度言ふ、今時の法師どもは、あれはみんな大盗人ぢやが、

法師甲　これ〳〵順念、何をお言ひなさる、そのやうなたはけた事を言ふものではない、殊にこゝは入道樣の御前ではないか、氣をおつけなさい、

法師乙　御身こそ何をお言ひなさる、此の順念決してたはけた事は申さぬ、山法師どもが近年の騷ぎは何ぢや、何かと言へば、やれ法皇さまへお味方をする、いや上皇さまへお味方をすると、山の輿を擔ぎ廻つて暴れ散らす、つまりは俗人原の喧嘩口論、切取强盗と何が違ひますか、荒法師どもが法衣の袖をまくツて戰をする、殺生戒も女犯戒もあつたものかい、此の順念はまだ殺生戒は犯さぬ、人をあやめた覺えはない、

清盛　女犯戒はどうぢや、女子をあやめた覺えはないかな、

法師乙　いやあ入道さま、之はきつい事を仰せられます、此の順念五十になりまするが、いまだ曾て女子に手をかけた事はござりませぬ、たゞ斯う遠くから女菩薩たちの御來迎を拜んで居ればそれで結構なのでござります、

法師甲　さあ〳〵、もうよいからお暇を申し上げなさい、立ちませう〳〵、

法師乙　まだ言ひ居るか、入道さまからの許しの出ぬ内に立つのは無禮ぢや、これからお山へ歸つたら、またあのやかましい騷ぎの仲間入をせねばなるまいがな、もう當分お山へは歸るまいよ、

清盛　叡山の騷ぎといふのは何ぢや、

法師甲　いえ、なに、些細な事でござります、

法師乙　些細でもあるまいぞ、入道樣、それは斯うでござります、

法師甲　これ〳〵お止めなさい、あのやうな内輪事を申し上げて、折角の御酒興を殺いではなりませぬ、

法師乙　いや、内輪事ではない　入道樣、實はこのたび嚴島へのお行幸につきましてな、山のものどもに不服がござりまして、

清盛　その事なら、私が疾くに叱つて置いたから、もう騷ぐことは無い筈ぢや、

法師甲　さやうでござります、入道樣のお聲がかりでもう鎭まつた跡ぢや、順念は何をお言ひなさる、

法師乙　いゝや、まだ鎭まりませぬ、尊公はさうした僞りを言ふからいけぬ、成程上部は一旦鎭まりましたが、まことの不服はまだなかなか治まりませず、より〳〵不穩の事などを言ひ觸らす儕が多うござります、拙僧それがうるさうて、斯うしてお山にも居りませぬやうな次第で、なに、尊公とても同じ思惑ぢやといふではないか、何も入道樣の前ぢやからと言うて、取りつくろうて謊をいふことはない、謊をいふことはない、

法師甲　併し其の騷ぎは打すてて置けば自然と治まります、一旦入道樣のお聲がかりで、鎭まつたものを内輪の不服など申上げるのは、入道樣の御威光に傷をつけるといふものぢや、さあ〳〵其の話はもうお止めなさい、

清盛　いや、分つた〳〵、その事なら今一度私が叱つてやる、さうしたら皆も落ち付くであらう、さあ、今一めぐり酒を流行らせい、

（侍女、酒をついで廻る、清盛、立つ、妓王をつれて來る）

妓王、そちも何か歌はぬか、そちはいつも便りなささうに默つて沈んでゐる女子ぢやな、そちは今に尼法師にでもなるのぢやらう、

妓王　でも、上樣にも、此の節は管絃を聞いてお鬱ぎ遊ばすことがございます、私はあれが氣がかりでなりませぬ、

清盛　ふむ、そちもそれに心づいたか、私もな、此の頃は時々氣が弱くなつてな……ま、やめい〳〵、今の私が身の上に鬱ぎの種はない筈ぢや、いま日本の天下は私が威光で光つて居る、なう妓王、そちとても、私が寵愛してやればこそ、それ程美しく見えるのであらうが、

法師乙　順念はもう酩酊いたしました、こゝらでちよつと御免を蒙りまして。（座をすべつて緣端に出で、柱によりかゝつて、うつらうつらとして居る）

妓王　それは上樣の御威でございますもの、その前に出ましたら、どんな者でも消抑されて了ひます、それでも妓王には、また妓王のよい所が……幾らかあるとは思し召しませぬか、ほゝ、上樣、如何でございますか、

清盛　いや、さうでない〳〵、私の物ぢやと思ふから、それで美しいのぢや、さう思ふと、咲き盛つたあの櫻よりも、嗳いその肌の色が遙に美しいぞ、もつとも、よい女子だけは、他のものぢやと思ふと尙よく見えることがある、えゝ？　妓王なども、若い仇し男を見て、さうした心を起すことがあらうな、

妓王　私は、たゞもう上樣の大きな光に包ま

れて、外のものは何も目に這入りませぬ、斯うしてぢつとお惠みに身を任せて居りますれば、此の上欲しいと思ふ願ひは一つも起りませぬ、たゞ此のやうな、身に餘る榮華がいつまで續きますかと、それが氣がかりでございます、

清盛　そちはいつも心許なさうな奴ぢやな、ちやうどあの花のやうな奴ぢや、見事は見事ぢやが、今にも散りさうで手が離されぬ、私までが、どうかすると釣り込まれて一緒に心許ない思ひをする、さうかと思ふと、時々はもう、そちが側にゐても私には何の手ごたへもない心地がする、そちのゐることを忘れて了ふことがある、

妓王　さうして私は、段々と上樣に棄てられて行くのでございませう、心許なうございます、

清盛　はゝ、はゝ、今私が言うたのは、そちを疎略にするといふのではない、そちがあんまり弱いからぢや、もつと强うなれ、强うなれ、さ、もつと近う寄つて一つ飲め、私はな、そち達のやうに、ちよつとすると、もう直ぐ此の世の事にあきらめをつけて、此の上望みは無いなどと、ちゞこまつて了ふことは嫌ひぢや、そち達も私の側にさへ居れば、少しも氣づかふ事はない、平家の運勢は千萬年ぢや、なう資成、

資成　あの櫻を見るにつけましても、誠に世は平家の天下でございます、

法師乙　併しあの櫻は、今が眞つ盛りと見えますから、やがてもう、散るかも知れませぬ、

資成　（目で制しながら）これ〳〵、何で其のやうな不祥な事をおつしやる、寢ぼけてでもおいでなさるか、

法師乙　いや、御當家の御代はさうではございますまいと申すので、

清盛　なう御坊たち、考へても見い、保元平治このかた、此の入道は隨分身を棄てて上へ奉公をして居る、さればこそ、跡の月には新御門もいよ〳〵御即位で、當家は准三后の宣旨を蒙つた、鹿ケ谷の一類、法皇の御謀叛でさへ此の淨海には敵はぬでないか、法皇さまの鳥羽におはすのを、世間は何かと言ふさうぢや、淨海の身にもなつて見て呉れい、あれほど長いお馴染でありながら、つまらぬ奴等の口車に乘つて、當家を亡さうとされる、それもお上へなら、此の淨海が首一つ差上げて、少しも惜しいとは思はぬが、お上といふのは上部のこと、裏には當家の繁昌を嫉む輩が牙を磨いて待つて居る、當家が亡びればそれらのものの天下になるのぢや、なう御坊、それでも私は負けて居らねばならぬぢやらうか、

法師甲　御もつともと存じます、たゞ天下を味方になされて、佛法王法の憎しみをお受けなされぬ御用心が（此の時法師乙、緣端に音を立てて眠りこける）肝要と存じます、

清盛　やめい〳〵、この淨海が生きて居る限りは、日本國中、當家に指を差すものは一人も居らぬ、

（此の時取次の侍士出で來る）

取次　先程から白拍子の佛と申すものがお車寄に參つて居りますが、是非一度お上へお目通りが願ひたいと申し張つて、何と叱つても歸りませぬ、いかゞいたしませうか、

季貞　これ〳〵、御前へさやうな推參な事を申し上げるとは何うしたものぢや、それは屹度狂人であらうから、早く引き出すがよい、

侍士（立ちかゝる）　私共が參つて引立てませう、

取次　いや、引立てますのなら、世話はございませぬ、私共が引立てますから、どうか其

のまゝにおいで下さい、

妓王　まあ、待つて下さい、上様、あの、佛と申しますのは、此の頃洛中に名高い舞の名人でございませう、上様のお氣晴しに、どうかお呼び入れ下さいませ、それに白拍子と申せば、私とても元は同じ身の上でございます、折角尋ねて參つたものを、すげなくお歸しなさるのが本意でもございますまい、呼び入れておやりなさいませ、

清盛　いや、ならぬ〳〵、そちが居る西八條へ、何うしてさやうなものが推しかけて參つたか、不埒ぢや、神と言はうが佛と言はうが、妓王の居る所へ足踏みもかなはぬと、早くさう言へ、

妓王　いえ〳〵、私への義理をお立て下さるのは嬉しうございますが、お願ひでございます、どうか呼んでやつて下さいませ、佛御前とやらを、私も見たうございます、

清盛　はゝゝ、遠慮をするな、そちに義理を立てるのではない、私がそちより外の女子は見たうないからぢや、追ひ返せ〳〵、

取次　はッ、（立つて行く）

妓王　女子の身を追ひ立てて、恥をおかゝせなさるのはむごうございます、召し返して、せめて御對面ばかりでもしてやつて下さいませ、妓王がゐて歸したと申されては、私の女子が立ちませぬ、資成どの、どうぞ止めて下さいませ、

資成　ごもつともではございますが……（立ちかけてもぢ〳〵する）

清盛　よし〳〵、それ程に言ふなら呼び返してやれ、資成、行つて連れて來い、

資成　かしこまりました、（急ぎ足に出で行く）

（一座動搖する）

清盛　さあ、妓王、もつと近う寄れ、斯う並んでゐて佛とやらを見てやらう、どのやうな女子でであらうな、（妓王の手を取る）

妓王　でも上様、佛御前が私よりも美しい女子でございましたら、上様はどうなさいます、

清盛　そちより美しい女子が、日本國はおろか唐にも天竺にも居る筈はない、安心して居れ、

妓王　まあ、上様のお口のよい事、でも上様はもう私などはお忘れなさるのでございませう？

清盛　そちを忘れるとは？

妓王　先程さうおつしやつたではございませぬか、

清盛　あゝ、またあの事を言ひ出したか、あれはな、そちばかりを忘れろといふのではない、そちが側にゐることを忘れるときには、私は京の町まで忘れてゐる、そして何所かもつともつと花やかな所を心の中に描いて樂んで居るのぢや、そちもよく、京はいやぢやと言ふではないか、

妓王　私は京を遁れて、極樂浮土のやうな靜かな所へ行きたいと思うて居ります、

法師甲　極樂浮土の御誓願は御奇特でござります、

法師乙（寢言のやうに）南無阿彌陀、南無阿彌陀、

（此の時資成、佛をつれて登場、佛、下手に平伏する）

資成　車に乗つて歸りかけました所を、呼び戻して召しつれましてござります、

清盛　あゝ、さうか、佛とやら、よく聞けよ、私はな、そち等がやうな推參者に會ふ筈ではなかつたが、こゝに居る妓王が達てと申すから會うてやるのぢや、顏を上げて見せい、そして妓王に禮を言へ、

佛（顏を上げ大膽にぢつと清盛を見て）はい、

ありがたうございます、冥加でございます、どうぞお見知り置き遊ばして……

（清盛、ぢつと佛の顔を凝視して其の美貌に驚き、覺えず妓王の手を取り落す、妓王もはつとして身を退く）

清盛　おゝ、そちが佛か、私はどうやらそちを見たことがあるやうに思ふが、まあ近う寄れ、もつと近う進め、そちは一體どこの者ぢや、

佛　はい、私は以前福原に居りましてございます、

清盛　ふむ、では福原でそちに會うたかな、私は少しもおぼえて居らぬが、とにかくそちの顔は、私にはどうも初對面のやうには思はれぬ、昔馴染にめぐり逢うたやうな氣がする、

妓王　では佛御前は、上樣と福原以來のお馴染でございますか、

佛　妓王さま、御免遊ばせ、私も志願の筋がございまして福原には居りましたが、ぢきぢき上樣にお目通りいたした事は一度もございませぬ、ましてお馴染などとは、思ひもよらぬ事でございます、上樣がおたはむれをおつしやるのでございます、

妓王　さやうでございますか、上樣、

清盛　いや、たはむれではないが、ぢき〳〵會うた事もないやうぢや、たゞ不思議とこの女子の顔が私には昔馴染のやうに思はれるといふまでぢや、氣にかけるな〳〵、

佛　かやうなお席へ推參いたしまして、妓王さまへ申譯がございませぬ、

妓王　いゝえ、少しも御遠慮には及びませぬ、

清盛　遠慮するには及ばぬ、それでそちが今日まゐつたのは何か願ひの筋でもあつてか、

佛　お願ひと申しますのは、たゞ斯うして一度上樣にお目通りさへかなひますれば、それでよいのでございます、私も是まで名ある方さまへお目通りのかなうた數は多うございますが、たつた一つ、今日本で一の位において遊ばす上樣に、お目通りがかなはぬ許りに、私は生甲斐のない思ひをいたして今日までこの西八條の御殿を夢現に慕うてまゐりました、

清盛　それ程ならさうと早く申し出ればよいのに、つまらぬ所に氣を兼ねたものぢやな、さ、そちに一つ酌をして貰はうか、

（侍女、銚子を渡す、佛、取つて酒をつぐ、其間）

そこでそちは、私に會うてどう思ふか、これで滿足したと思ふか、

佛　お目通りして、優しいお言葉まで受けました上は、私はもう故郷に歸つて、一生藪草の中に埋もれましても、殘惜しいとは思ひませぬ、今日のお目見えを、一生の思出にいたします、

妓王　藪草の中とやらにお歸りには及びますまい、いつそこのまゝ上樣のお側にでもおいで遊ばせ、上樣も屹度その方が御滿足でございませう、なら、資成どの、

資成　（當惑して）はゝ、はゝ、佛どの、もうそろ〳〵御退きなされてはいかゞでございますか、

清盛　いや、まだよい、まだよい、妓王にも酌をしてやれ、

妓王　いゝえ、上樣、私はもうたんと頂きました、どうぞお樂ひなさいますな、

佛　妓王さまにも、お目通りのかなひましたのを、身に餘る面目と存じて居ります、

妓王　いゝえ、私などは物の數でもございませぬ、却つてお邪魔であらうとお矣止に思うて居ります、それとも、何か此妓王にも上樣と同じくお氣に召した所がございますか、

佛　ほゝ、それはもう、上樣のやうなお方に是

程思はれておいで遊ばす、日本一の果報なお方にお目にかゝるのでございますもの、女子冥加と思うて、嬉しく存じて居ります、

清盛　なう妓王、佛は思うたよりも賢い女子ぢや、そちが妹と思うて召使うてやらぬか、

妓王　私には、今居ります妹一人で澤山でございます、御所望なら上様御自身でお召し遊ばせ、

法師甲　資成どの、季貞どの、一旦この席をおひらきなされて、上様を奥へ御案内したらどうぢやな、

資成、季貞　それがよろしうございませう、一度席をお改め遊ばして、

清盛　いや、まだよい、まだよい、大分興が湧いて來たぞ、此の尊い春の日を、さう心忙しくするものではない、心ない雑人原どもぢやな、そち達も今少し酒を過ごせ、

（侍女、酒をつぐ、皆々どよめく）

佛　どうぞ一つお聞かせ下さいませ、

清盛　いや、そちにさう言はれると二の句は出ぬわい、そち一つ歌うて聞かせい、舞うて見せい、なう、妓王、おもしろからうぞ、

妓王　どうぞお聞かせ下さい、

佛　音に聞えた妓王御前のお目通りで何で私風情が歌どころでございませう、おなぶり遊ばしますな、

清盛　いや〳〵、遠慮は無用ぢや、私が所望する、辭退するには及ばぬ、さ、早く歌うて聞かせい、舞うて見せい、

佛　今はこのやうな身なりでございますから後ほどまた、舞の裝束でお目通りが願ひたうございます、

清盛　烏帽子水干の支度なら、次の間でせい、私は是非今そちの舞が見たいのぢや、さ、これをあちらへ案内して舞の裝束いたしてやれ、

（侍女一人、佛を案内して次へ行きかゝる）

佛　（ぢつと妓王を見る、妓王臆して俯く、清盛の方へ媚を寄せて）ではしばらく御免遊ばしませ、

清盛　おゝ、早く行つて支度をせい、それから皆のものは廂へ出い、

（清盛、立上る、皆立つて席を改める）

おゝ、御坊は鼓が上手ぢやといふから、一つ舞に合せて打つて下さい、これ誰れか鼓の用意をせい、

（侍士一人、次へ鼓を取りに行く）

法師甲　いや、私どもの鼓はとてもこの席で打つやうなものではございませぬ、平に御辭退申上げます、愚僧どもはもう御免を蒙つた方がよろしうございます、これ順念々々、目をおさましなさい、もうお暇を申上げよう、

（法師乙、目をさまし緣に坐つたまゝ不思議さうに一座の光景を見廻してゐる）

清盛　いや、ならぬ〳〵、是非に打つて貰はう、佛はどうした、待たせ居るな、遲いぞ〳〵、

（立つて次の間の行へ行かうとする、途端に佛、水干を着舞の姿で出て來る、從ふ侍士鼓を持つて來て法師甲に渡す）

（此間妓王は忘れられたやうに、手持無沙汰で片隅に悄然として坐つてゐる）

やあ、佛か、美しいぞ〳〵、まあそちらを向いて見せい、目がさめるやうぢや、妓王よりも美しいぞ、

法師乙　南無阿彌陀佛々々々々々々、

清盛　さあ舞へ、さあ舞へ、

（清盛、座に就く、佛、席の中央に身構して）

佛　（檜扇をかざし、今様を坐つたまゝ歌ひ、後起つて歌ひながら舞ふ）

「君をはじめて見る時は、千代も經ぬべし

姫小松、お前の池なる龜が岡に、鶴こそ
群れゐて遊ぶめれ」
徳是北辰　椿葉影再改
尊猶南面　松花色十廻
（責歌、亂舞）
（よしさらば、心のまゝにつらかれよ、
さなきほ人の忘れがたきに」
清盛（興奮して）やあ〳〵、そちは舞も歌も
上手ぢやな、妓王にも劣らぬよい聲ぢや、殊
に私が上を歌うた歌が氣に入つた、かはいゝ
奴ぢや、私も入道の身ぢやから、今日からは、
さつぱりと佛の御弟子になるぞ、こつちへ來
い、こつちへ來い、（清盛、歡喜極まつて興
奮した體で佛の方へ立つて行き、手を取つて
奥へ連れて入らうとする）
佛　まあ上樣、何事でございます、お放し遊ば
せ、お放し遊ばせ、
清盛　いや〳〵、放さぬ〳〵、私はそちに相談
がある、まあ奥へ來い、
（二人、奥手へ這入る、侍女等ついて這入
る、妓王、覺えず立ち上り、奥手を見込
みて立つ）
法師乙　とろ〳〵と居眠をして居るあひだに、
世の中が逆さまになつたやうぢやな、
資成　飛んだ事になつたものぢや、
季貞　妓王さまもお氣の毒な……
（皆々〳〵妓王の方へ氣をかねる）
法師甲　あゝ、さま〳〵の世の中ぢや、私等は
有爲轉變の教を目の前に見て居るのぢやな、
では皆さま、愚僧どもは一足お先へ失禮いた
します、
法師乙　またあの嵯峨の庵で一休みして行かう
か、どれ〳〵、
資成　我々も兎も角下つて居らう、
季貞　それがよからう、お次へ下つて居りませ
う、
（皆々〳〵行きかける）
侍女　大夫判官さま、お召しでございます、
季貞　あ、まだ何か御用があつたかな、何御用
であらう？（考へながら一人奥へ行く）
（皆々退場）
妓王　（泣き伏して、やがて額を上ぐ）えゝ口惜
しい、斯うしては居られぬ、あまりと言へば
非道なお仕打、私も奥へ行つて上樣の存分に
して貰ふまでぢや、
（血相をかへて立上らうとする時奥から
季貞出で來る）
季貞　妓王さま、何うなさいます、おかはいさ
うではございますが、唯今入道さまからお暇
が出ました、あなた樣おいでの限りは佛御
前が御遠慮なさるとかで、早々此の屋敷をお
立ち退きなされいとの事でございますぞ、
妓王　えゝ？　大夫判官さま、それは何事でござ
います、あなたはまあ何をおつしやるか、
季貞　妓王さまに、上樣からお暇が出たと申す
のでございます、
妓王　まあ、それはまことでございますか、私
は夢を見て居るのではございますまいか、
季貞　夢でも何でもございませぬ、急いでお立
ちのきの用意をなさい、
妓王　それにしても、あんまり淺ましいではご
ざいませぬか、人の心がさうまさ〳〵と變る
ものとは、私はどうしても思はれませぬ、
季貞　そこが入道さまのお氣質とお諦めなさる
外はありますまい、今日は一旦お引取りなさ
れて、入道さまのお心の解ける日をお待ちな
さい、茲で何うなされうとしてもすべはござ
いませぬ、
妓王　では、せめて佛御前に一目會うて、言ひ
たい事がございます、
季貞　お恨みは御もつともでも、今おあひなさ
れてはお爲になりませぬ、ま、ま、茲は一旦

素直にお立ちなさい、

妓王　いえ〳〵、恨みは申しませぬ、たゞ一言言つて置きたい事がございます、お願ひでございます、

季貞　いけませぬ〳〵、お氣の毒でも、今日は是非このまゝにお下りなさい、兎も角お文へなりとも下つて、それからの御思案になさいませ、さ、さ、（手を執つて引立て退場す）

（幕）

第二幕

舞臺面、前と同じ夜の景、

清盛　これ〳〵、まてといふに、なぜそのやうにあわたゞしう逃げて行くのぢや、佛、佛！

佛　（衣裳をかへやゝしどけない樣子で檜扇を持つたまゝ足早に出て來る、そして振りかへつて、輕く扇で手拍子を取つて）はゝ、はは、お歳のせゐでお足元があぶなうございますよ、さ、こゝまでお出で遊ばせ、早くつかまへて御覽遊ばせ、

（清盛、わざと足をゆるめて出て來る、つづいて侍女一人、あかしを持つて出て前面にする。）

清盛　謔を言へ、私が無理を言つたのではない、そちが何かひどく物におびえたではないか、

佛　ほゝ、上樣、お氣がつきましたか、では教へて差しあげませう、上樣のお頭の影がそれ、あの障子にも映つて居ります、大きな入道さまではございませんか、

清盛　はゝはゝ、大入道ぢやな、あゝいふのがまことに出て來たら、そちはどうする？

（佛、清盛に寄り添うてかしこまる）

それ見い、

何事ぢや、けたゝましい騷ぎをするではないか、

佛　（衣裳をかへ、しどけない樣子で足早に出て來て振り向いて輕く手を叩いて）ほゝ、ほゝ、上樣のお驚き遊ばした御樣子がをかしうございましたこと、

清盛　何がをかしい、をかしい所の騷ぎかい、

佛　でも上樣があんまり御無理をおつしやいますもの、

（二人並んで前の方へ出る）

清盛　そちもやつぱり弱蟲ぢや、妓王めがよく物おぢして、陰氣な事を言ひ居つたが、そちも似たものぢやな、妓王の事ばかり惡くは言はれぬぞ、

佛　はい〳〵、どうせ私風情が妓王御前の事など、とやかう申してはすみませぬ、御免遊ばせ、

清盛　妓王が物におびえると、屹度この京の都を私と一緒に出たいと言つて居つたが、ではこゝを出て何處ともあては無いといふ馬鹿な奴であつた、あいつはいつもあての無い愚癡ばかりこぼす女であつたよ、そちは妓王よりもしつかり者ぢやと思うたに、案外弱い奴ぢやな、

佛　實を申せば上樣、先程は全く恐ろしうございました、あの細殿を御覽遊ばせ、あの暗い中を妓王御前が恐ろしい眼でこちらを睨んで、魔物のやうに飛んで行きました、

清盛　たはけを言ふな、妓王は疾くに追ひ返したではないか、それぢやから女子といふものは相手にならぬ、そちだけは男のやうにすつきりした事を言ふと思うたに、やつぱり駄目ぢやな、

佛　でも上樣がこの都をお出遊ばすことがございましたら、私がよい所へ御案内申しませう、私はたんと〳〵よい所を存じて居ります、

清盛　おゝ、それは何ういふ所ぢや、私も實はもう此の都に飽きて來たから、そちの案内する所へなら行かぬ事もない、どこがよいのぢや、

佛　それは、もつと〳〵明るいよい所でございます、この京の都は、思うたよりも日影が薄くて、上様の御繁昌にも似ず、何所か淋しい所があるではございませぬか、日脚のさゝぬ隅々が多うございます、

清盛　私もこの頃さう思ふことがある、そちと私とは心が通ふと見える、そちに案内を頼んだら定めてそちの顔のやうに花やかな美しい所に連れて行くであらう、私はそちの跡になら、何所へでもついて行く、そちは私の案内者ぢや、

佛　屹度ついておいで遊ばしますか、

清盛　おゝ、ついて行く、そのよい所といふのは何所ぢや、一體そちは何所で生れて、何所に育つた女ぢや、今までに何んな男と連れ添うたか、白狀せい、

佛　お聞かせ申しませうか、

清盛　おゝ、言へ〳〵、早く聞かせい、

佛　でも聞いた上でお腹立遊ばすやうな事がございましたら、

清盛　構はぬ〳〵、

佛　おやき遊ばしますなよ、（侍女の居るのを見て躊躇して）

清盛　やかぬ〳〵、あちらで其の話を殘らず聞かう、隱さず物語らぬと承知せぬぞ、さ、奥へ行かう、

佛　いえ〳〵、こゝがおもしろうございます、さ、あなた様もこゝへおいで遊ばせ、

（清盛を引よせ緣端へ並んで立つ、侍女、褥を取りに行かうとする、途端に風が吹き入つて燈を消す）

侍女　御免遊ばしませ、すぐに燈を持つて參ります、

佛　いえ〳〵燈には及びませぬ、燈の無いのが却つて風情でございませう？　上様、

清盛　暗いな、そちは淋しうはないか、私は暗い所が大きらひぢや、

（此の間侍女、褥をすゝめる、二人は伺立ちながら）

佛　でも、まあ御覽遊ばせ、あの淋しい景色も惜しいとも思召しませぬか、（風また吹き入る）おゝ冷たい風――髪の毛が總毛立つやうでございます、（清盛に寄り添ひながらふと後を見て）あの渡殿の邊の暗うございますこと、若しや先程のがまことの妖王御前であつたら、……

清盛　引つとらへてそちが思ひのまゝにしてやるまでぢや、さあ、約束した話を早く聞かせぬか、

佛　まあ、ちよつと、あの月を御覽遊ばせ、風に吹きさらされて、白けて居ますこと、それにまあ花吹雪の散りますこと、淋しい中に賑かな、不思議な景色ではございませぬか、

清盛　これ佛、そちは私をじらして居るな、

佛　でも、これ程の景色を仇にお過し遊ばす上様なら、私は嫌ひでございます、人に情の厚いものなら、月夜にもやはり情が無くてはなりませぬ、上様は月夜の眺めには少しも情をおかけなさいませぬか、

清盛　むづかしい事を言ひ居るな、なるほど之はよい景色ぢや、あわたゞしい花の散り方をする、さあ、そこでそちの話はどうぢや、そちが見て來たよい所といふのは何所ぢや、其の男といふのは何ものぢや、

佛　まあお待ち遊ばせ、上様が若し花なら、此のやうにあわたゞしい中で散りますのと、おつとりした暮合の空に一ひらづつ散つて行きますのと、どちらがお好きでございますか、

清盛　また妙な事を言ひ出したな、それは靜かに散って行かれるものなら、其の方がよさそうにも思ふが、併しわしにはそれは出來ぬ、私の體にはいつも嵐が吹いて居る、これ、この胸に手をあてて見い、この通り胸には大波が打つてをる、それから此の手、それ、しつかりと握つて見い、熱いでらう、燒けつくやうであらう、それから此の頭、頭の中はいつも此の風が立つてをる、散るならあわただしく散るのが私の本性ぢや、

佛　ほんたうに上樣のお手が熱いこと、それからお胸の動悸も高う御座いますこと、私は今ほじめて上樣のほんたうのお心を聞いたやうな氣がいたします、私も上樣と御一緒にあわたゞしう散つて見たう御座います、

清盛　あゝ、またつまらぬ事を言はせをる、私は散際の相談などは嫌ひぢや、さあ〳〵、今度こそそちの話の番ぢや、其の男は何ものぢや、今生きて居るか死んで居るか、

佛　二人は殺され一人は生死の程も分りませぬ、

清盛　なに、二人も三人も男がゐにといふか、それは一體どうしに譯ぢや、どれ〳〵、私が手を引いてやるからあの花の中をあるきながら、精しい話を聞かせい、私はもう、我慢がならぬぞ、さあ來い〳〵、

（侍女、履物をすゝめる、其の方を向いて）そちは次へ下つて居れ、それで、其の最初の男といふのは何者ぢや、

佛　在所の濱邊にわびしい住居をしてゐた若い男でございます、

（話しながら二人つれ立ち庭に降り花の散る中に姿を沒する、引かへに妓王硯箱をかゝへて忍びやかに入り來り、襖の前に立つて二人の姿を見送り、襖に歌を書く、終つて立ち上り庭の方を見る、途端に出て來る佛と顏を見合はす）

おゝ、あそこに妓王御前が……（清盛にすがりつく）

清盛　えゝ、また騷ぐか、何事ぢや、そちには妓王が祟つてゐると見えるな、（こちらを見て）おゝあれは妓王ぢや、おのれ、邪魔をしようと思うて來居つたか、憎い奴め、

（駈け上り捉へようとする、妓王、すり抜けて逃げる、清盛、茫然と見送る、佛も庭に立つたまゝ見送つてゐる、やがて清盛、心づいて振りかへり、緣端へ出て）これ佛、こちらへ上らぬか、妓王はもう逃げて了うたぞ、さあ〳〵、上つて來い、

佛　でも不思議ではございませぬか、衣の音も立てず飛ぶやうに逃げて行きました、

清盛　はゝ、妓王はみの輕い奴ちやからな、今に呼び寄せて糺明してやる、

佛　（上りながら襖をすかし見て）おゝ、上樣、あれは何でございます、お障子に大きな文字が見えます、

清盛　え、障子に文字が？（不審さうに一足すさつて透し見る）うむ、成程文字が書いてある、今まで何も無かつた筈ぢやが、不思議だな、（次の間の口へ行つて）これ誰れか居らぬか、早く燈を持て來い、燈を、

侍女　（次の間から）はい、只今、（燭臺を持つて出てすぐ引下る）

清盛　（燭臺を襖の前に引きよせ斜に面して立つたまゝ）

「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草」

佛　（横向きに膝をついて坐つて）

「何れか秋にあはで果つべき」

（讀み了つてしばらく間を置き顏を上げて）

はゝ、はゝ、是は何でございます、上樣、萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか

秋に逢はで果つべき、早い遅いはあつても、草といふ草はみんな今に枯れて了ふぞ、見てをれ、と申すのでございませう、

清盛　是ればたしかに妓王が手ぢや、重ね〳〵不埒な奴め、平家の繁昌を呪ひ居つたな、

佛　（笑つて）いゝえ、上様、此の歌は私の身の上を呪うた歌でございます、此の佛も今に妓王御前と同じやうに、秋風たてば棄てられて、枯れ果てて了ふといふ謎でございます、

清盛　それなら愈々けしからぬ事ぢや、此の淨海が寵愛するそちの身の不祥の事を言ふとは以ての外ぢや、今まであれ程大事にしてやつた私に、恩を怨みで返し居る憎い奴め、呼び寄せて成敗してやる、

佛　まあ、お待ち遊ばせ、私が秋に逢ひますも逢ひませぬも、みんな上様のお心一つではございませぬか、妓王御前をお咎め遊ばす前に、まあ上様のお心から聽きたうございます、私もあの妓王御前と同じやうに、また誰れかに見かへられるのでございませう、あゝ、あゝ、さうした上様の水性と知つたら、こゝまで慕うて參るのではございませんでした、

清盛　馬鹿を言へ、私の心はな、疾くからそちの様な女子を慕うてゐるのぢや、あの妓王などはあれはほんの膳部の口取に過ぎんのぢや、私はあの様な弱い女は嫌ひぢや、美しうて强い、そちのやうな女子でなくては私の心には手ごたへが無い、何んで私がそちを棄てるものか、そちの身にだけは、平家の天下の續くかぎり夢にも秋風は聞かせぬぞ、

佛　上様はそれをお誓ひ下さいますか、

清盛　おゝ誓ふとも、上は梵天も照覽あれ、私の眞實は變らぬ、私は一目そちを見た刹那から不思議と魂をひきよせられて了うた、そちは私の生命ぢや、

佛　上様、それは神もつて誠でございますか、私が上様のお生命になつてもよろしうございますか、

清盛　おゝよいとも、そちの好きなことなら私は何んでもする、そちの行きたい所へは私もついて行く、そちは私が生命の案内者ぢや、併し佛、私にばかりこれほどの誓を立てさせて、そちは少しも誓を立てぬではないか、そちから先に私を棄てたらどうするか、

佛　ほゝ、此の天が下は上様のものではございませぬか、私が若し上様を棄てましたら上様は草をわけて土を篩つても私をお捕へなさることが出來ませう、そのやうな御懸念は御無用でございます、

清盛　いや、さうでない、そちの體は捕へることが出來てもそちの心は捕へられぬ、そちの心に秋風が立つたら私はどうなるのぢや、

佛　はゝ、上様には日本國中の男女がみんな心を寄せて居ります、私風情のものがよし一人や二人心を背けたとて上様は少しもお困り遊ばす事はございませぬ、却つてよい厄拂をしたと思召すでございませう、

清盛　またたはけた事を言ふ、私はなるほど上部にこそ日本國中を味方にも持つて居るが、心はいつも一人ぼつちぢや、私はいかにも强い男ぢやとは思ふが、心はいつも淋しいぞ、私の後にはいつも暗い懸念のやうなものが附きまとうて居る、それぢやからこそ、私は强いものが好きぢや、美しいものが好きぢや、暗いじめ〳〵したものが大嫌ひぢや、私は淋しい男と思うてくれ、

佛　上様、私は必ず〳〵一生上様のお傍は離れませぬ、

清盛　おゝ佛、

佛　けれども上様、若しや私の體に自然と秋の衰へが來ましたら、其とき私はどうなるでございませう、私もやつぱり妓王の跡を

追ふのではございますまいか？

清盛　またそのやうに心淋げな事を言ふか、そちが衰へるまでには私の方が先に衰へて了ふ、ぢやからそちが先に立つて、私にいつまでも力を添へてくれといふのぢや、もうさうした鬱しい話はやめい、先の事は分らぬとして置け、未來といふものはまだ紐を解かぬ經卷のやうなものぢや、何が書いてあるか知れたものではない、それよりも先程あの前栽で開いたそちが男の話の續きを聞かせい、で、その濱邊に住んだ男はどうしたのぢや、

佛　それが私の十六の初戀でございます、そして其の男と二年ばかり、あの福原近くの松原と苫屋の蔭で二人は身も世も無いほどの戀をしつゞけました、

清盛　これ佛、少し遠慮して物を言はぬか、清盛がこゝで聞いて居るのぢや、

佛　はゝ、御免遊ばせ、ではもう其の話は申しますまい、

清盛　いや、いかぬ〳〵、其の後が聞きたいのぢや、たゞ少し手柔かに話せといふのぢや、

佛　春の宵にはあの濱邊に絹を搖るやうな漣が寄せて、砂子が銀のやうに月に照つて暖い風が沖から吹いて來ます、私はいつも松並木の黑い影の中に木の幹に寄りかゝつて、その男の來るのを待つてゐますと、男は遠くから横笛を吹いて近づいて來ます、そしてあたりに人氣の無いのを見すましてはそつと出會うて一夜を千夜の思ひで契りかはしました、

清盛　そこはもう、それでよい〳〵、それからどうした、終りを言へ、終りを言へ、

佛　それがいつか、笛の逢瀨といふ浮名になつて、さる人に引分けられて了ひました、

清盛　それは何者ぢや、引分けてそちをどうしたといふのぢや、

佛　庄司の房遠といふものが庄司の威光で其の男を殺して了ひ、私はいつか房遠の心に從ふやうになりました、

清盛　ふむ〳〵、房遠はけしからぬ奴ぢやな、そしてそちはどうして房遠と別れたか、房遠との仲はどうであつたか？

佛　房遠も男でございました、さる隱れ家でざれ歌を作り私がそれに合はせて舞ひました、

清盛　ふむ、そちが舞うたのか、その舞は見たかつたな、

佛　今もよく覺えて居ります、舞うてお目にかけまうか？

清盛　おゝ、舞うて見せい〳〵、

佛　（扇をかざして歌ひながら舞ふ）

唄「さても女子は濱松原に、笛の逢瀨を松風々々、私も君ゆゑ戀松原に、房遠男を斬つて棄てけり、あとには浪も引しほの、月は冴えたり小松原」

清盛　やあ〳〵、いや〳〵、房遠はけしからぬ奴ぢや、そのやうな歌は忘れて了へ、

佛　けれど房遠との逢瀨も半年ばかりで、房遠もまた私ゆゑに亡ぼされて了ひました、そして私は其の房遠よりも強い男に身をまかせて一年が程をすごしましたが、其の男もいつかは其の房遠と同じ身の果になるかと思ふと、もうそのまゝには居られませず、強いもの勝ちの世の中に私が思ひのまゝに身を任す男は日本國中で一番強い男でなうてはならぬと、其の時私は心を定めてひとりで福原へ拔け出ました、そしてたうとう此の京にまでさすらひ出たのでございます、

清盛　そしてたうとう此清盛を探しあてたといふのか？

佛　福原で上樣と妓王御前の噂を聞きました時は、羨ましうございました、それで私も白拍子となつて、見事この世に力と頼む一の

人にまみえて見せようと決心したのでございます、

清盛　よし〳〵、私が其一の人になつてやる、斯うして私とそちとが同じ時代に生まれ合うて、互に慕ひ求めて居るものに出會ふといふのは宿縁ぢや、必ず私の傍を離れるなよ、

佛　私は離れませぬが、上様こそお離れ遊ばしますな、いつど、やうなものが出て參つて二人の仲に立ちませうとも、

（此間資成登場）

資成　申上げます、前の右大將さまがたじ今これへお見えでございます、

清盛　なに宗盛が來たと？　今時分に何用があつて來たのぢや、

（座に就く、佛、從ふ、資成、席を整へて引退くと、ちがへて宗盛、衣冠にて登場）

おゝ、宗盛か、夜中に何事が起つたのぢや、何か急用か、さあ、そこへ〳〵、

宗盛（會釋をして座に就き、佛を尻目に見て）父上、お話が密談にわたりますがお差支がございませぬか？

清盛　うむ、遠慮には及ばぬ、それに居るのはな、何さ、あの、それ、佛といらてな、近う召し使うて居るものぢや、大事ない〳〵、

佛　私は暫くお次へ下つて居りませうか、

宗盛　いや、父上がお許しの上は差支ありませぬ、そのまゝにしておいでなさい、それにしても妓王御前はどうか致しましたか、父上、

清盛　うゝ、あれはな、無禮を働いたから先程暇をやつた、之を見い、斯ういふ事を書き殘して出て行つたわい、

（二人ふりかへり襖の文字を見る、佛、燈を取つて差し照し、ぢつと宗盛の顔を見る）

宗盛　「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草　何れか秋にあはで果つべき」

是は何とした歌でございますか、父上、

清盛　そこに居る女子を恨んだものともいふが、私は當家を恨んだ心と見た、

宗盛　妓王御前は、なぜにまた當家を恨みましたか、あれ程父上の寵愛を受けてゐた女子ではございませぬか、

清盛　さあ、それが私を恨んだのぢやから、不埒であらうがな、

宗盛　私には合點が參りませぬ、

佛　差し出がましうはございますが、其わけは私がよく存じて居ります、御免遊ばせ、右大將さま、

宗盛　はあ、

佛　私は佛と申して、京の町に舞と歌とを商うてゐた下賤のもの、今日上様にお目通りがかなひまして、お側にお仕へ申す身になりましてございます、どうぞお見知り置き下さいませ、

宗盛　して妓王御前との仲は？

佛　上様のお情が私の身に移りましてから、舊きは衰へるならはしで、自然と妓王御前の御寵愛が衰へました、それが妓王御前のお恨みでございます、

清盛　おとなしくさへして居れば、また何とかしてやる方もあるのに、あのやうな無禮な眞似をして居る、憎い奴ぢや、

宗盛　それでは妓王御前も不憫なもの、佛御前とやらもなぜ身をへりくだつて、情を讓つては、おやりなされぬ、妓王御前が恨むのも道理と思はれます、

佛　妓王御前のお恨みも、もつともとは存じますが、それかと申して、私が身を引くのもいやでございます、情の戰に、私が勝てば、負けた妓王御前が身を引かれるのも、是非ない成行と存じます、

宗盛　併し佛御前、勝ち誇るばかりが道でもありますまい、たまには負けておやりなさい、

佛　右大將さま、それが私には出來ませぬ、日々かりそめの仁義なら、それもよろしうございませうが、人一代の運さだめに、敵を立ててみづから亡びるのが眞の道とは存じませぬ、強いものが勝ち榮えてまゐるのは是非ないことではございませぬか、

宗盛　いや、勝つものも久しからず、因果應報の道理は恐ろしいと、お思ひなさい、妓王どのが此の歌を書き遺して置いたのも、偶然とは思はれませぬ、

佛　でも右大將さま、そのやうな歌は此の節日本の流行文句でございます、唐や天竺には、五百年も千年も前から、箕ですくふ程あると申すではございませぬか、それでも世の中は次ぎ〳〵に榮えてまゐります、

宗盛　盛者必滅は尊い佛法の敎であるのに、此の歌の心が佛御前には分らぬと見える、それともおん身は、佛法の法に背かうと言はれるか、

佛　右大將さまは、その法師づれが言ふやうな、殊勝らしい口眞似ををかしいとは思召しませぬか、盛るものも衰へ、盛らぬものも衰へるのが定なら、なぜせめて、衰へぬ前に、盛りの色のありたけを誇つて置けとは敎へぬのでございませう、暗い行末ばかり眺めてゐる、陰に籠つた世の中に、私はあの大日輪のやうな上樣を慕うてまゐりました、（清盛の方へ）緋葵の花が日に向いて赤い息を吹くやうに、天に上樣、地に私が面を見合せて、天竺の魔法にかゝつてゐる世の中を、大笑ひに笑うてやらうではございませぬか、

清盛　なる程、そちの言ふことは面白い、併し佛法の道もな、世を治めるには大切なものぢや、法師等が私の言ふ事をきゝさへすれば、あれで人の心をおだやかにする役に立つ、つまりは清盛が手足にしてはたらかすのぢや、あれも方便ぢや、道具ぢや、

宗盛　父上、だん〳〵と世のなりゆきを見ますにつけ當家の一門に集つた世上の恨みは、おもひのほかに深う御座います、

清盛　またそれを言ふか、その話はもうやめいやめい、此の淨海もよく承知してをる、

宗盛　それを父上は恐ろしいとは思召しませぬか、

清盛　はゝはゝ、そちはそれ程世上の恨みが恐ろしいか、弱い男ぢやな、亡くなつた小松内府が遺言とやらで、さやうな弱い事を言ふのであらう、内府を見い、餘り氣が小さかつたために、早死をした、此の淨海は死なぬぞ、人の恨みなどといふものは何時の代にもある、負けたものは何時でも勝つたものを恨むのが常ぢや、先方で恨むなら、此方でもそれだけの事をしてやる、向うが勝つか、此方がかつか、二つに一つのほかは世をわたる道はない筈ぢや、それともそちは先程佛御前が言うたやうに、一か八かの瀬戸際に負けてのきたいか、えゝ、馬鹿な事よ、なう佛、酒でも持つて來て賑かにせい、宗盛をもてなしてやれ、

宗盛　いや、それはお待ち下さい、まだ申上げる一大事が御座います、

清盛　そち達はむやみと後を見廻すから、それで無氣味になるのぢや、世の中は闇夜の獨り道と思うて後を向くと己が足音まで物の怪のやうに聞えて、ちりけ元がゾッとする、後にはいつまでも暗い影がついて來る、

宗盛　其の暗い影を父上もお氣付でございますか、

清盛　知つて居るとも、世の中に勝つたもの、強いものには皆その影がついて居る、が、私

はそち達のやうに其の影に怖ぢ恐れて逃げ廻ることは嫌ひぢや、なう佛、

佛　でも上様まで、お肩の凝るさうな强がりやうをなさいますこと、斯うしてお話の席にまで、のび〳〵した息は通ひませぬ、右大將さま、お庭にでもお降り遊ばして少しくおくつろぎなさいませぬか、

宗盛　いや、今宵はそれ程悠長な此の身でもありませぬ、

清盛　して、ほかの用事といふのは何事ぢや、

宗盛　實は私、今日上皇さまから鳥羽殿の法皇さまへお使に立ちました、

清盛　（屹となつて）なに、法皇さまへお使に？

宗盛　はい、お使に參りました、そしてあの鳥羽殿のわびしいお住居をつく〴〵見て參りました、それにつけ、私は、どうも當家の繁昌のうしろに、暗い不思議な物の影が覆ひかかつて居るやうで、不安でなりませぬ、

清盛　おろかな事を言ふな、たとひ法皇さまのお力でも、今この平家をどうなさる事が出來よう、して其のお使と云ふのは何事ぢや、

宗盛　たゞの御消息で、久々打たえておなつかしいから、近々にお出でなされて御對面なされたい、

清盛　そちはそれを唯の御消息とばかり聞いて來たか、

宗盛　私とても、それほどの事に心づかぬおろか者でもございませぬ、第一、ことさらに此の宗盛をお使にお立てなされた、上皇さまのお心からして、淺い御計略とは存じませぬ、併しいち早くそれにお氣のつく父上は……

清盛　（いら〳〵として）あゝ、もうよいわい、言ふな〳〵、さうした沈んだ話を聞くと、此の淨海までが勇氣を挫く、今淨海が弱い心を起したら、平家の一門は瓦解ぢやがや、たとひ山を移し海を干しても、入道が一存は立てずには居られぬ、これ佛、酒を持てこい、酒を、

（清盛、緣へ立ち出ようとしてよろめく、佛、走りよつて支へ、緣境の柱に立つたまゝ寄りかゝらせ、顏を見合せる、此のころから月が雲に隱れた爲、舞臺やゝ暗くなる）

佛　私のまゐるまで、こゝをお動きなさいますな、獨りでお動きなさいますとあぶなうございます、

（清盛、うなづく、佛、次ぎの間の方へ出て行く）

宗盛　それから鳥羽の御所では、この頃夜な夜な怪しい物の笑ひ狂ふ聲が聞えますとかで、世上のものが寄ると障ると耳口を寄せて取沙汰いたします、何か大事の起る前兆に相違ないと言ひ囃して居ります、總じて此の頃の世のさまが、上部の靜かさに引きかへて何か動亂の兆を呑んで居るやうで、私には心がかりでなりませぬ、例へば三位入道などが近頃の擧動にも不審な噂がございます、

清盛　不審な噂がある？

宗盛　はい、油斷はなりませぬ、

清盛　（益々いら〳〵として立つてゐるに堪へぬ如く體を搖かし、柱の根に坐る）はゝ、源三位などに何が出來よう、

宗盛　そればかりではございませぬ、此のたびの嚴島行幸で山法師どもの動搖が今以て收まりませぬ、

清盛　あれは、もう、私の聲がかりで鎭まつた筈ぢや、

宗盛　いや、まだ鎭まるどころではございませぬ、益々廣まつて行く樣子でございます、

清盛　いや、さういふ筈はない、私を差し置いて法師等が騷ぐ譯はない、

宗盛　たしかに此のたびの騒ぎは、たゞ事とは思はれませぬ、

清盛　たしかにさうか？

宗盛　はい、

清盛　憎い法師めら、此の淨海を何と心得て居るか、今に見て居れ、山門も佛法も一揉みに揉みつぶしてやる、酒、酒、酒を持て來ぬか、

（侍女等、酒肴を運び、清盛に褥をすゝめ、二人に酒をつぐ）

宗盛　併し佛法の力は人の力でどうすることも出來ませぬ、山法師を敵にして平家の天下がいつまで續くと思召しますか、せめて佛法の前には弱くおなりなされて……

清盛　なに、弱くなれと？

宗盛　はい、佛法の前には弱くおなりなされて、末の安泰をお祈りなさるやう、お願ひに出ました、

清盛　弱くなるとは、どうすればよいのぢや、

宗盛　先づ法師等をおなだめなされて……

清盛　うるさい奴等ぢやな、この清盛が山法師どもの前に降服するのか、此のわしに弱くなれといふのか、（しきりに酒杯をかさねてゐたが、座に堪へぬやうに立上り、緣の邊をあるき廻る）

宗盛　法皇さまへもお詫の心で……

清盛　あゝ、うるさい事ぢ　な、この私に弱くなれといふのか、私にはとてもそれは出來ぬ、達て私にそのやうな事をせいといふなら、私はもう此の京には居らぬぞ、

（此の時また月光が舞臺を明るくする、庭の奥にあたつて、佛の聲が聞える）

佛　上樣、私は今宵の月で、またあの福原の住居を思ひ出しました、

清盛（聲のする方を見込みながら）おゝ、佛か、そちも福原にゐたと言うたな、

佛（庭先へ出て來て）上樣は席をお動きなさいましたな、あぶないお足元ではございませぬか、

清盛　そちを待つてゐた、さあ、こゝへかけい、そちは今、福原と言うたな、

佛（緣に腰かけて）はい、あの南の海の、明るい明るい福原の御殿を、上樣はお忘れなさいましたか、福原はよい所とは思召しませぬか、

清盛　おゝ、そちも福原が好きぢやといふか、福原はよい所ぢやな、

佛　上樣と御一緒で、今一度福原に住みたうございます、此の樣な月の晩にはあの松原かけて夢を見てゐるやうな景色が、まあどんなでござりませう、

清盛　私もさう思ふ、福原がなつかしうなつた、さうぢや、私は福原へ行かう、もう此の京の都がうるさくなつた、

佛　ではあの福原に新しう都をお立て遊ばすおつもりでございますか、

清盛　さうぢや、こゝに居ればこそ、やれ山法師、やれ謀叛と噂が絶えぬ、あの福原は後が山で、前に海を控へて、山法師等も容易に降りては來ぬ、うるさい傲訴沙汰や爭亂の沙汰も自然と遠のくであらう、さうぢや、一思ひに京を福原へ移して見よう、私はどうして今まで福原を忘れてゐたか、佛、そちも福原の都へ來いよ、

佛　では、屹度あの福原に都をお遷しなさいますか、福原を京に見かへて御覽遊ばしますか、上樣、

清盛　おゝ、明日とも言はず、すぐに遷して見せるぞ、

佛　さうしたら上樣と私との新しい日も明日からさし初めるのでございませう、上樣、福原へは私が御案内に立ちます、氣を丈夫に

お持ち遊ばして日本國中に新しい日の目を見せておやり遊ばせ、玆ばかりが都ではございませぬ、

清盛　さうぢや〳〵、

宗盛　父上、それは御酒興でございますか、桓武このかた四百年の都を、さう輕々と遷されるものではございますまい、强てさやうな事をなされて、此の上にまた世上の恨みをお重ねなされば、福原は安泰の都とはならいで却つて平家の運の果場となります、

清盛　うるさい〳〵、もうそち等が說法は聞かぬぞ、私の心は定まつた、四百年の都が何ぢや、大極殿も紫宸殿も此の淨海が指一本の差圖で移して見せる、佛、そちだけは、いつまでも私の傍を離れるな、私は淋しい男ぢやからな、

佛　私は上樣の生命ではございませぬか、福原へは私が御案內に立ちます、そして新しい都へ！　新しい都へ！

宗盛　（氣色ばんで）これ佛御前！

佛　（緣上り、清盛の手を取つて）さあ、上樣、奥へ參りませう、

清盛　おゝ、奥でまた一さし舞うて、平家の繁昌を祝へ、福原の天下は萬々年ぢや、（侍女に）資成を呼べ、鼓の用意をさせい、

侍女　かしこまりました、（一人次ぎへ行く）

清盛　（佛の肩にすがり、奥へ行きかける、侍女一人、從ふ）明日はいよ〳〵福原ぢやな、そちも奥で舞の支度をせい、今日の今樣は何とか言うたな、さう〳〵「君を初めて見る時は千代も經ぬべし姫小松……」（半ば歌ひながら這入らうとする途端に）

宗盛　佛御前！　お待ちなさい！

佛　（初め立留つて清盛の手を取り、後一足離れて正面へ出で）何でございますか、右大將さま、お呼びとめ遊ばしたのは、

（此の言葉のあひだ、侍女、清盛を扶けて奥へ入る）

宗盛　あなたはなぜ父上、外道に引入れようとなさるか、それは天魔外道の仕業といふものぢや、

佛　私はたゞ上樣のお爲を思ふばかりでございます、都をお遷し遊ばすのも、腐つた水は流して御覽遊ばせ、古い住居はかへて御覽遊ばせ、それが此の世に榮えるおきてかと私は存じます、

宗盛　それは敎に背く外道といふものぢや、

佛　私から申せばあなたのお敎が外道かも知れませぬ、

宗盛　これ佛御前、

佛　はい、

宗盛　あなたは死んで貰ひたい、

（短刀の襠に手をかけ立ち上る、一足早く資成出で來り宗盛を押し止める、佛は一足さがつたまゝぢつと見て）

佛　ほゝ、私はまだ死にませぬ、生きて榮えて行かねばなりませぬ、御免遊ばせ、右大將さま、

（言ひすてて、すた〳〵と奥へ入る、宗盛、資成に止められて立膝の儘默然として跡を見る、外は風全く止んで月がますます冴えてゐる）

（幕）

◇

本能熱のロマンチシズム時代、而して見神熱の宗敎的傾向時代、而して自己靜觀のナチュラリズム時代、此の遷移を今になつても認め得ない人があるとは何うしたものだ。

（『對話隨筆』より）